

大阪インターナショナルチャーチ ゲストスピーカー：ブラッドフォード・ハウディシェル
ルカによる福音書 24 章 44-45 節

2022/07/17

「権威ある神の言葉 - 聖書の正典」(OIC 信仰声明シリーズ)

ルカによる福音書 24:44-45 「44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」 45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、」皆さん、おはようございます。皆さんと再びお会いできることを嬉しく思います。先月から、私は教会の「信仰声明」についての説教を続けていますが、その最初の段落は、「聖書は神の靈感による、誤りのない言葉である」という私たちの信仰を確認するところから始まっています。もう一度、大阪インターナショナルチャーチの「信仰声明」の第一段落を引用させていただきます。

私たちは、旧約、新約聖書の両方が、原文に誤りのない、神の靈感による神の言葉であり、人類の救いという神の完全なる啓示であり、すべてのキリスト者の信仰とその人生に対して、神聖かつ最終権威を持つものである、と信じている。テモテへの手紙

第二 3 章 16 節

先月のメッセージで、靈感、誤謬、そしてキリスト教の教義と実践の最終権威としての聖書の教義を説明しました。この「正典」という言葉は、神の言葉である聖書に含まれる権威ある書物として、信仰共同体が認識している書物のリストを指していることを、簡単にお話しました。今日は、この聖書の権威をテーマに、「権威ある神の言葉 - 聖書正典」と題して、お話をさせていただきたいと思います。今日のメッセージの後半では、聖書の正典についての議論で終えたいと思いますが、その前に、私が今神学校で受講している神学の講義で学んでいる内容を紹介したいと思います。私たちが神の言葉を理解し、受け入れるための基礎となる、聖書をどう見るかについての三つの重要な教義です。それは、「啓示」、「靈感」、「啓発」です。そこで、今日のメッセージは 4 つのパートに分かれています。

第 1 部：啓示

第 2 部：靈感

第 3 部：啓発

第 4 部：聖書の正典

まず、第 1 部から始めましょう：啓示

神が私たちにご自身を現されない限り、私たちは神についてあまり知ることができません。

詩篇 19:1 - 「天は神の栄光を語り告げ、大空はその御手のわざを告げ知らせる。」

神学者は、2 種類の啓示を語ります。第一の種類は、一般啓示と呼ばれるものです。この詩篇 19 篇にあるように、私たちは天を見上げることによって、神の栄光を感じ取ることができます。神は宇宙の創造者であり設計者であり、その複雑な設計の規模を目の当たりにする時、天上と地上に畏敬の念を抱かずにはいられなくなります。

誰でもこの素晴らしい創造物を見ることができ、このすべての背後に偉大な設計者がいるに違いないと感じることができるので、これが「一般」啓示と呼ばれています。

詩篇 8:1 - 「私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたご威光を天に置かれました。」

神は被造物である地と天において、その輝きと威厳を示されました。これは、すべての人間が見ることができます。そして、それ以上のものがあります。

詩篇 50:6 - 「天は神の義を告げ知らせる。まことに神こそは審判者である。」

私たちは心の底で、自分よりも偉大な方がいることに気づいています。それは、私たちの周りの世界を観察することによって気づくことです。しかし、自分の中、心の中はどうでしょうか。私たちは、この素晴らしい世界を見るだけでなく、自分の心の中には、何が正しくて何が間違っているかという分別を持っているのです。実は、神は、この二つの知識（目で見えたこと、心で感じたこと）に対して、私たちに責任を持たせていることをご存知でしょうか？

ローマ 1:19-20 「¹⁹なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。²⁰神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」

私の神学校の教授がこう言っています：「私たちは、自分たちが住んでいる所で、被造物を見ることによって、神について多くのこと - 神の知恵、神の力、神の永遠 - を知ることができるのです。私たちは皆、良心を持っています。神を語るのは頭上の星ではありません。子供たちが「これは正しい、これは正しくない、これは公平ではない、これは正義ではない」と主張する良心というものがあります。それが私たちのただ中にあります。私たちの中に法があります。だから私たちには一般的な啓示があるのです。」(Bruce K. Waltke, OT300 旧約聖書神学, Logos Mobile Education. ベリンガハム、ワシントン州。Lexham Press, 2018)。

もう一度、詩篇 19:1 を見てみましょう。天がすること、空がすることに注目してください。天は語り告げる。大空は告げ知らせる。語り告げる.....告げ知らせる。これらの動詞は発話行為を表しています。神は語る神であり、その被造物でさえ、神を私たちに明らかにするために語っていると表現されています。

これが **General Revelation** (一般啓示) です。これらの真理は、誰にでも明らかです。

第二の啓示は、特別啓示と呼ばれています。これは、神が特定の人々に対して、特定の言葉を用いてご自身を啓示されることです。簡単に言えば、これは聖書であり、神の契約の民に対して神御自身を現わされることです。神はご自分の民との関係を望まれ、そのためにご自分を現わされます。そして、私たちとコミュニケーションをとるためには、私たちの言葉を話さなければなりません。聖書は、私たち人間になじみのある文体様式で構成されています。神が書かれた言葉を通して私たちに語ろうとされたとき、神は特定の著者を使って、特定の時代と場所で、特定の人々に共感できる方法で伝えようとしたのです。しかし、そのメッセージは、その時代だけに限定されたものではありません。聖書の主要なメッセージは、ある種の超越的な性質を持っていて、現代の私たちにも語りかけてくるのです。私の神学校の教授が聖書について述べた言葉をもう一度引用しましょう。「聖書は単に歴史的なものでなく、超越的なものであり、神の言葉はすべてあなたへの神の言葉であり、あなたへの神の個人的なメッセージなのです。」

神からあなたへの個人的なコミュニケーションです。

私が使っているテキストブックの中に、興味深いコメントがあるので、引用したいと思います。これは「**Evangelical Dictionary of Biblical Theology** 聖書神学の福音主義辞典」からの引用です。

「聖書の主張は、初めから終わりまで、神が語られたということです。そして神は言われた」という繰り返しの言葉は、神がどのように宇宙が存在し、被造物に生きるよう指示され

たかを物語っています。創世記 1 章では、最初の人間への命令、2 章ではエデンでの生活に関する具体的な指示、3 章では罪の発見とそれに対する応答が書かれていますが、そのすべてにおいて、この特徴的な神の活動が語られています。そして、聖書の冒頭の章で確立されたパターンは、劇的な変化の範囲を伴いながら、黙示録に至るまで繰り返されます。律法、預言者、歴史において、私たちは神の語りかけを読むことができます.....だからこそ、"書物"の権威の問題に取り組むとき、語る神についての聖書自身の記述が、鋭い焦点となるのです。と言うのは、その宗教は、語る神の宗教だからです。」(Nigel M. de S. Cameron, "Revelation, Idea Of," in *Evangelical Dictionary of Biblical Theology*, electronic ed., Baker Reference Library; Grand Rapids: ベーカー・ブック・ハウス、1996 年；679 頁)。

聖書の宗教は、語る神の宗教です。神は私たちにご自身を啓示され、その啓示を通して私たちは神を知り、神と関係を持つようになるのです。私の好きな聖句のひとつに、ヨハネによる福音書 6 章 68 節があります。イエスに従う者たちがイエスから離れつつあったとき、イエスは 12 人の弟子たちに、彼らもイエスから離れたいのかと尋ねられました。ヨハネ 6:68 「すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」

私たちが永遠の命への道を示されるのは、イエスを通してであり・・・神の言葉を通してであり・・・神ご自身の啓示を通してです。

神は語る神です。一般啓示では、天が神の栄光を私たちに宣言しています。特別啓示では、神は特定の時間、特定の場所で、特定の人々に特定の言葉を語られます。その言葉は、今日も神の民に語りかけるために、この聖書に記録されているのです。そして、御子である主イエス・キリストを通して、神は語られるのです。実際、受肉において、神は人となり、私たちと共に住まわれます。私の神学校の教授が興味深いことを言われたので、皆さんにも紹介したいと思います。神の言葉は聖書のページに書き記されたとき、受肉し、そしてそれから、主イエス・キリストが、この世にお生まれになった時、神御自身が、人間の肉体を取られました。イエスは、私たちに対する神の究極的な啓示なのです。

ヘブル 1:1-2 ¹神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、²この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。

御子を通して、神はこの素晴らしい被造物をお造りになりました。御子を通して、神は私たちに語りかけておられるのです。イエス・キリストの生涯と死と復活によって、私たちに救いが与えられます。それがキリスト教のメッセージの核心です。

では、第 2 部に進みましょう：「靈感」

これについては、先月、長々とお話ししました。今日は、ほんの少しだけ簡単にお話しします。

靈感の教義の鍵となる聖句は、テモテへの手紙第二 3 章 16 節です－「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」

この "Inspired by God" という言葉は、文字通り「神の息を受けた」という意味です。聖書の言葉は神の言葉であり、神の権威を持って語られているのです。もちろん、聖書の各書物には人間の著者がいて、その著者は特定の時代と場所で、特定の読者に向けて書いていますが、その著者が書いた言葉には神の力と権威が吹き込められています。ですから、それは私たちへの神のメッセージとなります。

ペテロの手紙第二 1 章 20 - 21 節「²⁰ それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。²¹ なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」

神の著者と人間の著者がどのように協力して聖句を生み出したかについて、著名な神学者ベンジャミン・ウォーフィールドはこのように書いています。：「聖書全体は、人間の著者の活動に取って代わることなく、彼らと共に働くことによって、そこに入り込んだ神の活動の産物である。したがって、聖書は、神と人間の活動の共同の産物であり、両者はあらゆる点でそれを貫き、調和して共に働き、ここが神であそこが人間というのではなく、あらゆる部分、あらゆる言葉、あらゆる特定において神と人間が同時にいる文書を生み出す。」(B.B. ウォーフィールド著「聖書の中の神と人間」Presbyterian Journal、1884 年 5 月 3 日)

第 3 部「啓発」に進みましょう。

第一に、神は私たちが神と関係を持つことができるように、ご自分を現されます。

第二に、神は私たちに神のメッセージを伝える人に靈感を与えます。

第三に、神は私たちの心はそのメッセージを受け取り、理解できるように準備します。

この第三の段階は、「啓発」として知られています。

靈感と啓発の両方は、主に聖霊の働きによるものです。しかし、三位一体の全ての位格がこの働きに関与していると言われています。

十字架にかけられる前夜、イエスは弟子たちにこのように言われました、ヨハネ 14:16-17

「¹⁶ わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。¹⁷ その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。…²⁶ しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」

イエスは間もなく弟子たちのもとを去りますが、父が弟子たちと共に住まわせるために聖霊を送り、そしてイエスが教えたことを彼らに思い出させると約束されました。

復活の後、イエスはルカ 24:44-45 - 「⁴⁴ さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」⁴⁵ そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、」

メシアを指し示す旧約聖書の預言、つまりイエスにおいて成就された預言を理解するように、彼らの心を開かれたのです。しばらくして、49 節「さあ、わたしは、わたしの父の約束しただけのものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都（エルサレム）にとどまっていなさい。」と言われる。その「父の約束」とは聖霊のことであり、使徒の働き 1:4-8 では、これらの記述が繰り返され、拡大されているのがわかります。

使徒パウロはコリント人への手紙 第一 2:10-13 「¹⁰ 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。¹¹ いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにだれも知りません。¹² ところで、私たち

は、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。¹³ この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。」

プロテスタントの改革者ジョン・カルヴァンはこのように言っています。

「御言葉は、霊の内なる証しによって封印されるまでは、人の心に受け入れられることはないでしょう。したがって、預言者たちの口を通して語られた同じ霊が、私たちの心に浸透して、彼らが神の命ずることを忠実に宣べ伝えたことを私たちに説得しなければならない……」。

たとえ、それ自体の威厳によって尊敬を勝ち得たとしても、それが聖霊によって私たちの心に封じ込められるときにのみ、私たちに重大な影響を及ぼすのです。したがって、その力によって啓発された私たちは、聖書が神から出たものであると、自分自身や他の誰かの判断によって信じるのではなく、人間の判断を超えて、それが人間の働きによってまさに神の口から私たちに流れ込んできたことを、完全に確信して断言するのです。(ジョン・カルヴァン、『キリスト教宗論集』、Ed. John T. McNeil, trans. Ford Lewis Battles (Philadelphia: Westminster, 1977), 1.7.4-5.)

この「啓発」の教義については、これで全部です。

それでは、第 4 部に進みましょう。：「聖書の正典」

私たちの聖書の教義の基本は、旧約聖書 39 巻と新約聖書 27 巻が、私たちが神の靈感による言葉であると考え、書物を構成しているという信仰です。これらは、聖書の正典を構成する書物です。

この「正典」という言葉は、信仰共同体によって公式に認められた、聖書の権威ある書物のリストという意味です。ギリシャ語の原語は「*canon* カノン」(*κάνων*)で、「物差し」「定規」という意味です。この言葉は、聖書について語るとき、神の靈感を受けた権威ある書物として認められている聖書の書物を指しています。つまり、これらの書物は、あらゆる教えや行動を評価するための適切な尺度であるということです。私たちの信仰声明で述べられているように、聖書は「すべてのキリスト教の信仰と生活のための神聖かつ最終的な権威」なのです。

時々、なぜプロテスタントとカトリックでは旧約聖書の中に含まれる本が違うのですかと、聞かれることがあります。カトリックでは、旧約聖書の中で、いくつかの他の書物を権威あるものとして認めているのです。しかし、東方正教会では、これらの他の書物を「Deuterocanonical」、つまり「第二の正典」と呼んでいます。なぜ、キリスト教の宗派によっては、これらの他の書物を聖書に載せているのでしょうか？その書物は権威があるのでしょうか？なぜプロテスタントはこれらの書物を受け入れないのでしょうか？

これらの質問に答えるために、旧約聖書と新約聖書の権威ある書物のリストがどのように発展してきたかを、数分間かけて説明したいと思います。この部分は説教というより、講義のような感じになるかもしれませんが、知っておくと役に立つ情報であることは間違いないと思います。

まず、旧約聖書の書物について説明します。パワーポイントの画面には、旧約聖書の各書籍を、皆さんにとって馴染みのある順番に並べた表があります。

モーセの五書	歴史書	詩編	大預言書	小預言者	
創世記 出エジプト記 レビ記 民数記 申命記	ヨシヤ記 士師記 ルツ記 1, 2, サムエル記 1, 2, 歴代誌 エズラ記 ネヘミヤ記 エルテル記	ヨブ記 詩編 箴言 伝道の書 雅歌	イザヤ書 エレミヤ書 哀歌 エゼキエル書 ダニエル書	ホセア書 ヨエル書 アモス書 アバデヤ書 ヨナ書 ミカ書	ナホム書 ハバクク書 ゼパニヤ書 ハガイ書 ゼカリヤ書 マラキ書

まず、モーセの五書ですが、これはよく「五書」と呼ばれます。「五書」とはギリシャ語で「5つの巻物」という意味です。ヘブライ語では、これらの書物は「トーラ」と呼ばれ、「律法」または「命令」を意味します。次に、ヨシヤ記からエステル記までの「歴史書」。これらの後に詩編が来て、それから大預言書、そして最後に 12 小預言書と続きます。これは、私たちがよく知っている配列ですが、古代ヘブライ人は、これらの書物を別の方法で配列しました。

少し前、ルカ 24 章でのイエスの言葉を引用しました。もう一度 44 節を見て見ましょう。

「⁴⁴ さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」彼らの聖書を配列するためにヘブライ人が使用した3つの主要なカテゴリーがありました。：「律法」…「預言者」…そして3番目のカテゴリーは「書物」…そして最初の「書物」は詩編でした。ですから、イエスが44節で言われたように、この3番目のグループがごく普通に「詩編」と呼ばれていました。

パワーポイントの画面には、ヘブライ語聖書をこの 3つのカテゴリーに分けた図があります。モーセの書以外は、前回の図と同じですが、順番がかなり違います。

律法(トーラ)	預言者	書物	アポクリファ
モーセの書(世界の創造からモーセの死まで): 創世記 出エジプト記 レビ記 民数記 申命記	物語(約束の地に入ることからバビロニア捕囚まで): ヨシュア記 士師記 サムエル記 列王記 預言的書: エレミヤ書 エゼキエル書 イザヤ書 十二巻	詩と知恵の書: 詩編 箴言 ヨブ記 雅歌 ルツ記 哀歌 コヘレトの言葉 物語(バビロニア捕囚から国への帰還まで): ダニエル書 エステル記 エズラ・ネヘミヤ記 歴代誌	新旧聖書の間の期間に書かれた書: 第三エズラ書 第四エズラ書 トビト記 ユディト記 エステル記補遺 ソロモンの知恵 シラ書(集会の書) バルク書 スザンナ ベルと竜 三人の若者の賛歌 マナセの祈り マカバイ記1 マカバイ記2

律法、預言者、書物の 3つのカテゴリーがあることが分かります。預言者のカテゴリーには、2つのグループがあります。物語：ヨシュア記、士師記、サムエル記、そして列王記です。本来、サムエル記と列王記は大きな本ですが、最近では、第 1サムエル記と第 2サムエル記、第 1列王記と第 2列王記の 2冊に分けられています。物語書の下には、預言書のリストがあります。：エレミヤ書、エゼキエル書、イザヤ書、そして 12書(12人の小預言者を 1冊にまとめたもの)。文書のカテゴリーには、詩編から始まる詩と知恵書があります。その下には、物語があります。：ダニエル書、エステル記、エズラ・ネヘミヤ記(まとめて一冊)、そして歴代誌です。現在、歴代誌は第 1歴代誌と第 2歴代誌の二つに分けられています。ヘブライ語聖書は 24冊ですが、私たちの旧約聖書は 39冊で、数は違いますが、書物は同じです。

このグラフでさらに強調したいことがあります。：あるカテゴリーの書籍がカバーしている歴史的な時間軸です。その情報を斜体で表示しました。

モーセの書：天地創造からモーセの死まで

預言者たち下にある物語：約束の地への入国からバビロンへの捕囚まで

書物の下にある物語：バビロン捕囚から国(約束の地)への帰還まで

この時間軸は、実はかなり重要です。ヘブライ人の歴史は、約束の地へ入る...バビロンへ捕囚...捕囚からの帰還という、ある大きな転換点によって特徴づけられています。捕囚は、長く人々の心に残る国難でした。そして、国への帰還は、それに参加した人々にとって素晴らしいものでした。そして、その時の聖句がいくつかあります。：エズラ・ネヘミヤ記、エステル記、そして小預言者の最後の 3つです。歴代誌は、アダムから、捕囚からの帰還まで

の歴史全体を概観しています。しかし、捕囚から帰還した後の数世紀、ユダヤ人の多くは、預言の声が途絶えた、神が民に語りかけなくなったと感じたのです。

しかし、いくつかの書物はまだ書かれていました。そのうちのいくつかは、現在では「アポクリファ」と呼ばれています。スクリーンにそのリストを表示しました。これらの書物が書かれた時期は、しばしば「聖書の間中期」と呼ばれ、旧約聖書と新約聖書の間で時期です。これらの書物は、歴史的に有用な情報や、この時代の人々の宗教的な生活について、いくつかの見識を与えてくれます。しかし、アポクリファの書物は質的に異なっています。

紀元 1 世紀に生きたヨセフスという有名なユダヤ人歴史家は、ユダヤ人の歴史書について非常に興味深いコメントをしています。彼は紀元前 5 世紀に生きたペルシャ王アルタクセルクセスに言及しています（彼はエズラ記とネヘミヤ記に記載されています）。ヨセフスはこのように言っている。：「アルタクセルクセスから我々の時代まで、完全な歴史が書かれたが、預言者の正確な継承がなされなかったため、以前の記録と同等の信用に値するとは考えられていない」（『アピオンに抵抗して』 1.41）。彼の言う「以前の記録」とは、先に紹介したヘブライ語聖書の書物のことであり、後に書かれた「完全な歴史」とは同等の価値を持たないと言っているのです。実際、古代ユダヤの文献には、これとほぼ同じことを述べているものが他にもいくつかあります。神が、神の民に預言者を送らなくなり、権威ある聖典の言葉が作られなくなったようです。

このような価値の低い書物の多くはアポクリファの中に入っています。このアポクリファというギリシャ語は、「隠されていたもの」という意味です。古代キリスト教の作家オリゲンによると、ユダヤ人はこの言葉を、価値あるものとして尊重されていたが、正典の水準に達していなかったため、「隠されて」、あまり使われなかった書物に対して使っていたそうです。実際、ユダヤ教とキリスト教の伝統では、これらの書物は宗教的に有益な文献としての価値はあるが、いかなる教義を確立するためにも使用されるべきではないと考えられていました。これは、ラテン語のヴルガータと呼ばれる翻訳を作成した古代の学者、聖ジェロームの意見です。しかし、中世に入ると、教会はユダヤ教のルーツから離れ、アポクリファはキリスト教の作家によって、特定の教義や慣習を支持するために使われることが多くなりました。プロテスタントの改革派は、聖人ジェロームのガイドラインに従って、アポクリファを聖典として否定しましたが、ローマカトリック教会は、最終的にこれらの書物の多くを聖典の正典の一部として承認しました。16 世紀半ばに開かれたトレント公会議で承認されました。

私は、恐らく、皆さんに必要以上に詳細を語りました。しかし、あるキリストの伝統がなぜ、他の書物を持ち、他のクリスチャンがなぜ、それらを拒否したのかを説明したかったのです。しかし、なぜあるキリスト教の伝統がこれらの書物を持ち、他の伝統がそれを拒否するのかを説明したいと思います。歴史家ヨセフスの証言と古代ユダヤ人の伝統によれば、アポクリファルの書物はヘブライ語聖書で正典として認められている書物には及ばないということを忘れてはいけません。私たちは、紀元前 5 世紀のバビロン捕囚からの帰還の時点で、聖書の正典は「閉じられた」、つまり旧約聖書に新しい書物を加えてはならない、と言っているのです。

新約聖書の正典について、少し述べておきましょう。洗礼者ヨハネの伝道とメシア、主イエス・キリストの出現によって、神の預言の声が戻ってきました。先月お話したように、使徒パウロが生きている間にも、彼の手紙はコピーされ、聖典として高く評価されながら、各教会の間で回覧されていたのです。その後、何世紀にもわたって、新約聖書の書物のリストがいくつか作成されたのですが、最終的には、使徒（マタイ、ヨハネ、パウロなど）が書いたもの、あるいは使徒の仲間が書いたもの（マルコ、ルカなど）を正典に含めるべきとされました。使徒が書いたもの、使徒の仲間が書いたもの、これが新約聖書を構成する書物を決定する基準である。画面には、新約聖書の各書籍を並べてみました。

<u>福音書</u>		<u>パウロ書簡:</u>		<u>一般書簡:</u>	
マタイによる福音書	使徒の働き	ローマ人への手紙	テサロニケ人への手紙一	ヘブル人への手紙	ヨハネの黙示録
マルコによる福音書		コリント人への手紙一	テサロニケ人への手紙二	ヤコブの手紙	
ルカによる福音書		コリント人への手紙二	テモテへの手紙一	ペトロの手紙一	
ヨハネによる福音書		ガラテヤ人への手紙	テモテへの手紙二	ペトロの手紙二	
		エペソ人への手紙	テトスへの手紙	ヨハネの手紙一	
		フリビ人への手紙	ピレモンへの手紙	ヨハネの手紙二	
		コロサイ人への手紙		ヨハネの手紙三	
				ユダの手紙	

以上で、聖書の正典についての説明は終わりです。聖書についていろいろとお話ししてきましたが、では、私たちは聖書をどのように扱えばいいのでしょうか。今日のメッセージの最後に、神の御言葉をどう扱うべきかについて、私の好きな聖句をいくつか紹介したいと思います。

第 5 部：お気に入りの聖句

詩編 119：11 - あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。

神の御言葉を読み、黙想し、心に蓄えることで、自分の精神や心を変えられ、そうすることで神を喜ばせないことを学び、自分の人生に罪を断つ習慣を建てて行きます。

詩篇 119:9 「どのようにして、若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。」

若い頃、私はこの 2 つの節を暗記したことで、罪から離れ、神に喜ばれる生き方をする習慣を築くのにとても役に立ちました。

コロサイ 3：16 - 「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」

私たちは、神の御言葉を徹底的に私たちに宿らせ、私たちの心を変えなければなりません。そうすれば、神の御言葉を他の人と分かち合い、互いに励まし合い、互いに戒めることができるようになるのです。これは、キリスト教の共同体である地方教会で生活する上で大切なことです。

私が一番好きな新約聖書の本は、ヤコブの手紙です。この本には、クリスチャンとしての生き方について、とても実践的なことがたくさん書かれています。ヤコブの手紙 1:22-25 にはこう書かれています。「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。²³ みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。²⁴ 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。²⁵ ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。」

あなたは祝福されたいですか？他の人を祝福する人になりたいですか？ただ聞いたり読んだりするだけで、その言葉を実践しない人ではなく、神の言葉を実行する人になりましょう。25 節を再び：完全な律法（これは実は私たちを縛るのではなく解放する律法であり、自由の律法と呼ばれています）を熱心に見て、神様の御言葉を守って、それを実践する効果的な実行者になりなさい。

ここで今日の最後の聖句、テモテへの手紙第一 1：5「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。」

クリスチャンの教えのゴールは、聖書の知識で心を満たすことではありません。聖書の学びのゴールは、人が変えられることです。純粋な心で人を愛すること。きよい良心を持つこと。誠実な信仰によって生きることです。